

## 高校生の喫煙に関する親の意識調査

佐藤キヨ, 太田敦子, 杉本博子  
渡部正, 佐々木蓮子, 佐藤静

要約：昨年の報告のように学校との連携において思春期保健について取り組みを行ってきたが男鹿市養護教員部会からも高校生の家庭内禁煙の必要性がうち出されていることと関連させ、地域での思春期の喫煙問題のとらえ方を明らかにし、さらにその実態に対し地域や親とも連携しながら問題を解決する対策を探ることを目的に、男鹿市内の3高校に平成元年度在籍した生徒の保護者に対し、喫煙に関する意識調査を行ったので報告する。

見出し語：家庭内禁煙、地域思春期問題

研究方法：男鹿市養護教員部会が平成2年3月高校生に行った「喫煙に関するアンケート調査」（以下「高校生調査」とする）結果と対比させるため、その対象となった生徒の保護者1546名に対しアンケート調査を無記名による郵送法で実施した。調査は平成2年10月～12月で集計はコンピューター入力により統計処理パッケージSPSSを用いた。

調査項目の一部を高校生調査と同じにし、「記入はなるべくたばこをすっている方をお願いします」と書き添えてある。

結果：回収は534名(34.5%)であり、その中の有効回答数は529(99.0%)である。回答者の内訳を

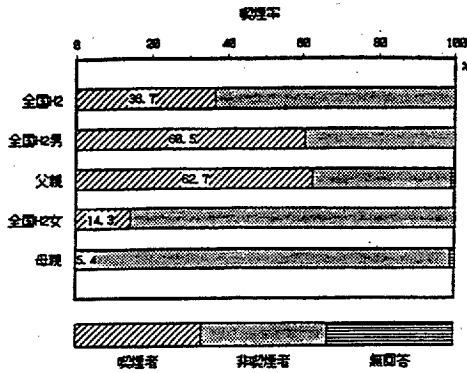
みると、父親358名(67.7%)、母親105名(19.8%)その他22名(4.2%)、不明44名(8.3%)である。

有効回答者の内訳

	回答者数	%
総数	529	100
父親	358	67.7
母親	105	19.8
その他	22	4.2
不明	44	8.3

・回答者の喫煙状況についてみると、現在喫煙しているものは父親62.7%、母親5.4%であった。これを平成2年日本たばこ産業株式会社が調査した全国の値(男60.5%、女14.3%)と比較してみると男性では若干高い傾向がみられた。

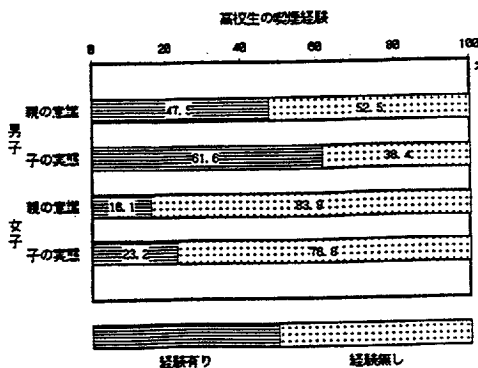
秋田保健所男鹿支所  
( Oga Branch of Akita Public Health Center, Akita Pref. )



・喫煙者全員について「たばこの魅力」を問うと(複数回答)「気持ちが休まる」46.9%、「気分転換になる」44.8%、「特に魅力はない(習慣に過ぎない)」34.5%であった。これは高校生調査の喫煙者の回答と同じ傾向であった。

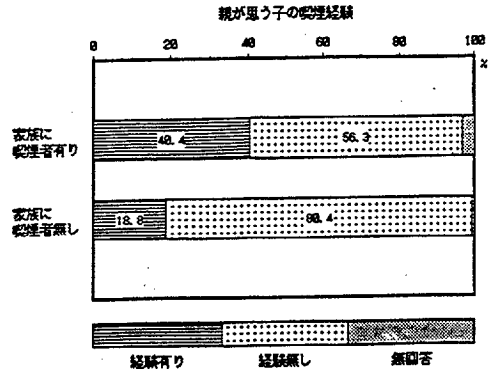
・「たばこをやめたいか」については「はい」と答えた者が63.1%であり、その理由の多くは「身体によくないから」と答えている。しかし実際にやめる努力や行動をおこしているものは半数以下の42.3%であった。

・自分の子供の喫煙について、自分の子どもはたばこを吸った経験があると思う親は34.7%であった。男女別では男子47.5%女子16.1%である。これは高校生調査に比べ、男子で約14%女子で7%低い数値であった。

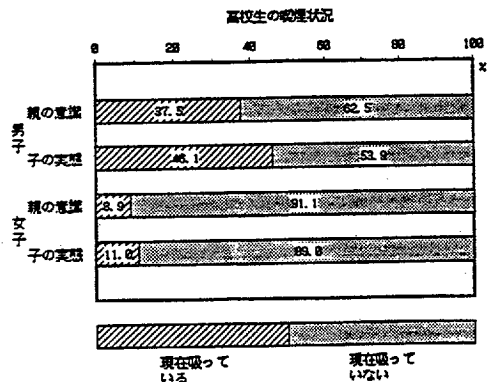


これを、喫煙経験の全くない家族とある家族でみてみたところ、経験のない家族の方に自分の

子は吸った経験がないと思うと答えた率が高かった。

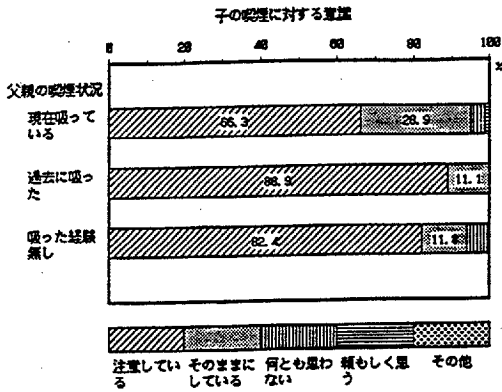


次に子供が最初に吸ったと思われる年齢では「高校生」だと思う者が72.7%で、なかでも1年生が特に高かった。高校生調査では「中学3年生」がもっとも多くなっており中学在学中からの喫煙者が全体の3/4を占めていることから実際は親が思う年齢より低いことがわかった。親が自分の子は現在も吸っていると思っている者は男子の場合37.5%、女子の場合8.9%で、これが高校生調査では男子46.1%、女子11.0%である。

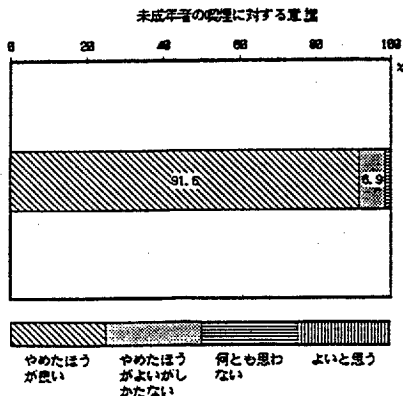


この子供達にやめるよう注意している親は76%何もせず放任している親は24%であった。さらにこれを、父親の現在吸っている者、過去に吸った者、吸ったことのない者でみると「そのままにしている、何とも思わない、頼もしく

思う」など放任している者の割合は、現在吸っている父親に一番高かった。



また、自分の子供の喫煙を知るきっかけを聞いたところ「たばこや吸殻を見つけた」「吸っているのを見た」「子供が言った」が上位であった。  
 ・自分の子を含めた未成年者の喫煙について親は「やめたほうがよい」と回答した者が9割を越えその理由の8割は「身体への影響」であった。



・たばこの害についての質問では99%が「身体へ害がある」と答えており、最も多かった内容は「呼吸器疾患」次に「癌」「ニコチン中毒」と続いていた。「他人への迷惑」と答えた者も58%いた。

考察：一般的に親は子供の喫煙に対し寛大であると言われるが、今回の調査では9割以上の親

が未成年の喫煙については否定的で、しかも「自分もできるならやめたい」「子供にもやめさせたい」と思う親が多かった。その理由は「身体に害があるから」と思い、家庭内でも禁煙について話し合いを持つなど何らかの対応をしている家庭が多かった。しかし対応の程度は喫煙している親と関係があり、積極的な禁煙教育をしているものは過去に吸って現在はやめた父親に一番多く、現在吸っている父親は一番少なかった。

また、家族に吸っているものがある場合に「自分の子も吸っていると思う」と答えたものが多かったことから、家族に喫煙者がいる場合はその子供も喫煙しやすいことが推察された。

以上のことから子供の喫煙は親や家族の喫煙と何らかの関係があると考える。これはこの調査を行うに当たり、市長、警察、福祉、教育関係者からなる男鹿市青少年問題協議会から得た「青少年の問題行動の原因の多くは家庭にある」という報告を裏付けるものとなった。

今回の調査結果は前述の各機関や父兄に情報として提供し、解決のための話し合いをする重要な資料となった。

高校生の禁煙のためにはまず親が禁煙すること、その禁煙行動をおこした時にはじめて自分の子供に対して積極的な禁煙教育ができることが予想された。

将来を担う未成年者の禁煙対策には、未成年者のみでなく、その親や成人を含めた地域全体の禁煙思想の高まりが必要であると考える。

文献：1)小川浩他：喫煙対策、公衆衛生404~409

VOL.53,1989

2)平成2年全国たばこ喫煙者率調査結果  
週刊保健衛生ニュース第569号

3)加賀谷幸子：喫煙に関するアンケート調査  
男鹿市養護教員部会、保健指導資料種2年



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約: 昨年の報告のように学校との連携において思春期保健について取り組みを行ってきたが男鹿市養護教員部会からも高校生の家庭内禁煙の必要性がうち出されていることと関連させ、地域での思春期の喫煙問題のとらえ方を明らかにし、さらにその実態に対し地域や親とも連携しながら問題を解決する対策を探ることを目的に、男鹿市内の3高校に平成元年度在籍した生徒の保護者に対し、喫煙に関する意識調査を行ったので報告する。